

感動する！数学

桜井 進

学生の頃から数学が苦手、いえ、嫌いだっただ私が、「きつと数学が好きになる！」という本書の帯に書かれた一文に惹かれ、思わず手に取っていました。試験のために無理矢理公式を暗記し、今は何一つとして思い出せないという情けない状況の中で、「本当にそんなことはあるの？」と、半信半疑で読み始めました。

本書でまず驚いたことは、数学の世界に対し、「美しい」という言葉が何度も何度も出て来たことです。「詩人でなければ数学者にはなれない」とも書かれています。数字そのものが美しく、導き出された公式がさらに美しい。「ロマンティックで感動を与えてくれる」数学は、正しいか、正しくないかという【絶対的な本物】しか存在しない、と言います。例えば、芸術の分野では、ミロのヴィーナスやパルテノン神殿は、黄金比が使われ、身近なものでは、ひまわりは、約137.5度の黄金角で種をつけ、一寸の狂いもないから美しいのだと。当たり前として見ていたものに、全て数学が関係している。

さらに、数学は宇宙共通の言語となるだろう、という説も。地球規模ではなく、数学は常に宇宙規模で考えている。何て、すごい。夢物語と言えないのも、漫画の世界でしかないと思っていたテレポーテーションが、既に光では成功したという事実が書かれているからでした。

読み終えて、数学が「好き」まで到達していませんが、私の中で数字が動き出し、少し身近なものになりました。

Y・C



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞

